

松本清張記念館

◆館報◆

2014.8
第46号

個人を伝えるは、
その時代なり歴史なりの
側面を叙することである。



『暗い血の旋舞』
昭和62(1987)年4月20日
日本放送出版協会
(書き下ろし)

現在入手できる本

『松本清張全集』64巻 1996年1月 文藝春秋
『暗い血の旋舞』文春文庫(電子書籍版) 文藝春秋

写真提供 オーストリア政府観光局/Trumler
Ball at the time of Johann Strauss Historical painting (1876) in Vienna Strauss Museum in Vienna

目次

- 松本清張研究会 第30回記念研究発表会 2
- 特別企画展「伯爵夫人ミッコ激動のヨーロッパに咲いた華——松本清張『暗い血の旋舞』」 5
- 展示品紹介 6
- 点描 作品の舞台を訪ねて 6
- 友の会活動報告 7
- トピックス 8

作品紹介

文筆家・杉田省吉は、青山光子(ミッコ・クーデンホッフ・カレルギー)について調査するためウィーンを訪れる。

青山光子は明治時代「正式に西洋の貴族と国際結婚をした最初の日本人女性」として知られる。オーストリアハンガリーに渡り、夫亡き後も伯爵家を守り、生涯日本に戻ることはなかった。息子リヒャルトは汎ヨーロッパ主義を提唱したことから「欧州連合の父」と称される。ミッコ論の多くはリヒャルトの著述に拠るが、杉田はより第三者的にミッコの実像とクーデンホッフ家の真実に迫ろうと取材を重ね、ミッコの過ごした一九世紀末から二〇世紀初頭の、華麗なウィーンとボヘミアの曠野を物語の背景にしようとする。

ミッコはヨーロッパの激動の時代に直面する。そのひとつに一九一四年六月のサラエボ事件がある。皇位継承者フェルディナントと共に銃弾に倒れた妃ゾフィーが宮廷で冷遇されていた原因は、彼女の出身地がボヘミアであったゆえだと杉田は思い至る。ボヘミアのもつ歴史的背景とは何であろうか。血縁で結束を高めてきたハプスブルク家の落日の遠因にも「暗い血」があったことに気づき、杉田は小説の構想を練りはじめる。

(専門学芸員 小野芳美)

「松本清張の昭和史」半藤 一利 (作家)

講演

●日時 平成26年6月7日(土)午後2時 ●場所 東京大学

ここでは、講演の一部を抄録します。講演の全内容は平成27年3月末発行の研究誌『松本清張研究』に掲載します。半藤氏の石原莞爾論や『昭和史発掘』の読み方、二・二六事件に対する海軍の動きなど、面白く興味深い話がまだまだたくさんあります。乞うご期待。



編集者が日曜日に休むのはけしからん

本題に入る前にはか話を一席。清張さんは浜田山に住んでおられました。私は、永福町に住んでいたんです。ほんと困ったことに、清張さんは日曜日になると、家に電話をかけてきまして、チリンチリンと朝に鳴るんですね。九時半ごろ、家内が出て「もしもし」というと、「松本だが」と言う。うちの家内が「どちらの松本さんですか？」と訊くと、「浜田山の松本だが」とおっしゃる。「はあ、清張さん」とびっくりする家内に、「半藤くん、いるかね？」というところで、私が出ると、「ちょっと急用があるから来てくれ」というんです。しばらく、家内は「朝の電話、私、出ない」といつて頑張ってましたが、しょうがないので、下駄はいて自転車に乗って、清張さんの家に行きました。そして、門の外に自転車を立てかけて鍵をしめて、中に入る。別に何も用はないんですよ。(笑)「編集者が日曜日に休んでいるのはけしからん」と言うんですよ。ひどい人ですね。「おれは働いてるんだ。それなのに編集者どもは日曜日にのうのうと休んでいる。これは良くないことだ」と、「だから、今日おまえはおれと話をしろ」と、

それだけのことなんです。ついでにちよつと脱線しますが、もう一つばか話を。話が終つて帰ろうとすると、私の履いてきた下駄がないんですよ。私が「下駄がないんですが」といったら、お手伝いさんが「あんまり汚いので捨てちゃいました」という。(笑)ひどいもんだと思いましたが、そういう仲でございまして、日曜日の休みに呼ばれていろいろな話をした。そのときの一つの話をお今日はさせていただきます。

反乱軍将校からみた石原莞爾

二・二六事件における石原莞爾は非常にむずかしい方です。むずかしい人ですが、石原莞爾のところだけを拾って見ると、事件に際して非常にカッコいい人なんです。

石原は反乱軍に対して「討伐せよ、こういうことは許さん」と、最初から最後までびくともしなかったという見方もできると思えますが、カッコいいことをやっているが、本心はどつちか分らんぞというところも見られるのです。どつちの見方もできる。そこで、この石原莞爾をめぐるのは清張さんと私は真つ向からぶつかり合ったのです。清張さんがあんまり石原莞爾を褒めたたえらると、そんなものじゃないんじゃないですかと、つい清張さんに文句を言いたくなるんです。清張さん、けっこう褒めているんですよ。

まず石原莞爾は、反乱軍将校の方からみると、どういふふうに見られたか。磯部浅一の『行動記』という膨大な手記が残っておりまして、それで反乱軍側の動きとか気持ちとか精神というものをだいたい察することがで

きるわけなんです。清張さんも『二・二六事件』の中にそれを十分にお使いになっている。

『第二回被告人訊問調書(磯部浅一)』をみると、決行の十日前、二月の十六日くらいにときに、『私共ノ氣持ガ判ツテ下サル方々』として名前がずらつと載つてるんです。つまり、反乱軍将校側がどうして立たなきやいけなかったのかという気持ちをよく分かってくれる方々として、ずらつと名前が挙がってます。牟田口廉也、鈴木貞一、小畑敏四郎、岡村寧次、山下奉文、本庄繁、荒木貞夫、真崎甚三郎、川島義之、今井清という面々が並んでおりまして、その中に石原莞爾という名前もあるわけでございます。ということは、決行十日くらい前には、石原はこつち組と反乱軍の人たちは見ていたことが、若干分るんです。

ところが、不思議なことは、決行当日になつたときに、磯部は『行動記』の中で『余の作成した惨殺すべき軍人』として、林銑十郎、片倉衷、武藤章という名前と並んで、石原莞爾という名前が挙がっているんですよ。ですから、スタートのときから、石原莞爾は反乱軍の方から見ると、侮み(めづ)たいにどつちの側かよく分かんない人だった、と見れば見れるんです。ただ、磯部がどこまで反乱軍将校全員の意思を代表しているかは分りません。惨殺すべき軍人として挙がっている名前は『余の』で、『私』がこう考へるといふわけですから、でも一応、林銑十郎にしろ、片倉衷にしろ、武藤章にしろ、統制派の錚々たる面々ですから、皇道派の方からみれば、まさに惨殺すべき人間であつたかと思えます。その中に、石原莞爾の名前がひよこんと出てくるんですね。『我々の心が分つてい人』の中にも出てくるし、『切り殺す方』

にも出てくる。たった十日の差なんです。ですから、これ、まことにややこしいんですね。従って、清張さんもこの両方を見ているから、お書きになりながら「さてさて」と思ったにちがいないと思うのですが、それはこれからの話になります。

清張さんの石原莞爾論

さらに、もう一つ石原莞爾の出番は、午前十時過ぎです。磯部浅一という反乱軍の中心人物が、たった一人で戒厳司令部に乗り込んでくるわけです。軍事参議官を追い出した今の話は、午前十時十分ごろの話だったので、ほとんど前後して、香椎戒厳司令部司令官と最後の談判をするために磯部が乗り込んできました。我々の今の思いを伝えたいから、香椎に会わせてくれと言って、強引に会いました。そして、磯部は滔々と言うわけです。すると、そこに石原が来て、清張さんはこう書くんです。突然、石原莞爾大佐が入ってきた。石原は磯部の横に来て、「君等は奉勅命令が下ったかどうか」と問うた。実際は、すでに石原自身が今朝、命令受領者を集合させて命令を伝えているわけです。これは磯部らの出方を見るための打診だ。「ハア、いいですね」と、磯部は腹を立てて突放す。勝手にしろということですね。へいですがねでは分らん、きくか、きかぬかだ。「其れは問題ではないではありませんか」と、磯部はわざと答えにならぬ答えをした。両方の話は噛み合わない。と清張さんは書いています。

そのときはそのまま分かれたんですが、また十時四十分頃になって、「再び石原大佐が入り来り、『司令官に強硬なる意見具申し

たるも、きかれず、司令官は奉勅命令は実施せぬ訳にはゆかぬ。お上を欺く事は出来ぬと言ひ、断乎たる決心だ』つまり、戒厳司令部としては天皇の奉勅命令が出たんだから、命令を聞かないというわけにはいかず、断固たる決心を固めているんだから、おまえが何を言ってもダメなんだと言ったわけですね。そして、「『どうだ、君等は引いて呉れぬか、この上は男と男の腹ではないか』と言ふた」。そこで、石原莞爾は涙をぼろぼろ流しながら、磯部の手をとって握手をしながら「引いてくれないか」と言ったらいいんですよ。

で、清張さんはこう書くんです。石原は戒厳参謀中、奉勅命令の即時下達論者であり、討伐も辞せない最強硬論者である。これが清張さんの石原莞爾論なんです。石原が杉山参謀次長の尻を叩き、決行幹部に心情的に同調して、態度の煮え切らない香椎司令官を引張り、遂に香椎をして「決心変更、討伐を断行せん」と杉山に言明させたのは、これまでみてきた通りである。したがって、石原が香椎に「強硬なる意見具申」をしたが、香椎がこれを承知しなかった、というのは、事実の顛倒で、石原が磯部の手前、司令官の「断乎たる決心」のせいにしてしまったのである。実力者が自己の意見を無能な上長の言葉にスリかえるのは常套手段である。と、石原は実に上手い芝居をうったと言っているです。討伐の強硬意見を持ちながら、実は石原も撤退を最善の策とした。と、清張さんは書いています。石原も、この事件を応用して、あわよくば自己の抱いている国内体制の改革策を遂行しようという肚があった二十六日夜、帝国ホテルで橋本欣五郎、満井佐吉の会談に参加したのもその現

れであるから、討伐は必ずしも彼の望むところではなかった。また、討伐を決行すれば、軍と国民とが分裂する結果になるので、石原の改革案遂行も困難となり、彼が育ててきた「満洲経営策」にも大きく影響する、そのようなことをいろいろ考えていた石原は、磯部に「引いてくれ」と頼んだのだから、握手をして落涙したというのは、石

原にしては珍しく軍人的感傷だ。少々芝原がかつてみえるのも、その場の昂奮であるうか。と清張さんは書く。石原も撤退を最善の策とした。石原の本心は討つんじゃないか、引かせようという思いにあったんだと清張さんは言うわけです。その辺はどうでしょう？ 皆さん、これは面白いことだと思いませんか？

研究発表

松本清張『火の路』とペルシア文化の飛鳥東漸

法隆寺烙印十字明日香石造物胡印及び景教遺物からのアプローチ

発表者 久米 雅雄

大阪芸術大学客員教授



印章研究と「火の路」

中国の印章の研究をやつてきて、日本の古代史を見ますと、松本清張先生が四十年前に指摘された『火の路』という小説のコアの部分か、どう考えても当たっているのではないかという気がしてならないんです。『火の路』の「火」はゾロアスター教の「火」で、ペルシアのゾロアスター教が日本の飛鳥まで入っているというのが、清張先生の自説です。一番感心したのはそれが単なる思い付きではないことです。実証がある。資料も信頼性の確認をした上で組み立てているんです。驚いたのは、中国の陳垣という学者の『火祇教人中国考』や、日本では東洋学者石田幹之助の『長安の春』などを読まれたり、専門家の生の論文が『火の路』にはいっぱい出ていることです。本当にこんなところまで勉強するのかというくらい、細かい掘りさげをしてそれを積み重ねて論を作っているんです。

トカラ人・ペルシア人の来朝と文物の東漸

一九七〇年代は、日本史がやつと東アジアで位置付けられる時代でした。中国とか朝鮮半島を視野に入れて日本の歴史を論ずることが始まった。ところが、清張先生は『火の路』連載の七三、四年の時点で、そこにペルシアを入れるんです。何ですか、これは？

西方のトカラ人とかペルシア人が日本に来たということは、『日本書紀』や『続日本紀』などの文献を調べると、白雉五(六五四)年、斉明三(六五七)年、斉明六(六六〇)年、天智八(七三〇)年など、ちゃんと出てきます。次に物証です。まず正倉院の文物です。「白瑠璃碗」、「漆胡瓶」はペルシアですね。それから法隆寺の「龍首水瓶」は、胴部にベガサスの彫り物があります。「四騎獅子狩文錦」も法隆寺の所蔵で、ペルシア人が獅子狩りをしている。また、大阪芸大の近く、安閑天皇陵とか奈良の新沢千塚とかに、

ペルシアのガラス碗が入っている。正倉院とか法隆寺に入る前の段階、六世紀の古墳の中から出たのです。ペルシア人との交流はもつと早い時期かもしれない。

松本先生もふれられてますが、法隆寺の伎楽面ですね。七世紀、八世紀のもので、『醉胡王』と『醉胡従』を選びました。西域のペルシア人の顔を写したものだと言われています。

『火の路』と明日香の石造物等の調査

『石造男女像』は、噴水で水が飛び出すようになっていて、松本先生は『酒船石』をハオマ酒醸造のための設備とされました。そして、こういう石造物は朝鮮半島には稀有で、ほとんど見られない。噴水という文化も朝鮮にはない、ペルシア独特の文化だと論じられたわけです。『猿石』も朝鮮半島ではちよつと見かけない。大きなものでは『亀石』がある。『二面石』は橘寺にあります。

橘寺の道路を隔てて広い公園があって、礎石が並んでいました。お寺の礎石は円形のものが多いが、ここはいくつか十字形をしています。仏教徒以外の寄進者（ペルシア系のキリスト教徒？）の気持ちが見れているのかなあと思ったりしました。川原寺の遺跡です。薬師寺の北端に「十字廊」という、十字形の建物跡が出てきました。何で寺院の北の端に十字廊を造る必要があるのか。

印章研究の中で、例えば、ヨトカンでペガス、ホータンではヘラクレス像とかアテナ像とかエロス像とか、ギリシアの神々の判子や封泥がシルクロードから大量に出ているわけです。ソグドとトカラの間にバクトリアという国があります。ギリシア人が移住して作った国です。ペルシアの力が強くなってバ

クトリアを包摂してしまうと、ギリシア文化をペルシアが呑み込んでしまう。すると、ギリシアやローマのものもペルシアに融合されて、中国に入り、遣唐使経由で飛鳥まで入ってきてないか、と思うわけです。次の貨幣の図はペガスで、裏側がアテナ。次の『二面』はヤヌスという神様。僕は橘寺の『二面石』に、ペルシア経由でかなり加工されたローマ的な要素が入っているような気がしてならないんです。

『猿石』なども、山王権現の耳のところは、「角」ではなくてまさに「ウイング（翼）」ですね。ヘルメスというギリシアの神の足には、翼がくっ付いてくることが多い。この写真のヘルメスは横にウイングが付いている兜（かぶと）を、頭に被っていますね。旅の守護神ヘルメスの影響がないか、ギリシア・ローマ神話の影響がないかと考えています。

次はペルシアの貨幣です。表に国王の肖像、裏はゾロアスター教の拜火壇と祭司像です。王様の王冠に月と星が出てくる。傍に七曜文が描かれることもあります。

印章では、ササン朝ペルシア時代のペガス、次はヘルメス像です。こういうのを見ますと、ペガサスの像が法隆寺に入っている、石造物も清張先生がおっしゃるようにペルシア系である可能性は高いけれど、ただその場合、ギリシアとかローマ的な要素も含んだペルシアなのかなという感じがします。

法隆寺伝来香木烙印十字

——唐代ペルシア系基督教印、奈良の都に入る——

二〇一三年に「景教印研究」を発表しましたが、問題として残ったのは、景教（ネストリウス派キリスト教）の判子も宋・元のものとは確認

できるけれど、唐の時代は「大秦景教中国流行碑」（七八一年）や墓誌などの遺物は出てくるのに、なぜ判子はないのかという疑問です。本当はあるのではないかと思いつながら、最後に辿りつくのが今回の「法隆寺烙印十字」（香木に字五七六上年の墨書）の研究です。

『法隆寺烙印十字』は江戸時代から注目（種井田忠友、長谷川延年）されていましたが、刻印や烙印の字はよく分かりませんでした。

『火の路』のお仕事をいち早く評価された伊藤義教先生は、刻銘の末尾はKであるから「ポーフトリー」でなくて「ポーフトラーク」と読んだ方がよく、その意味は「あなたが救われてましますように」という祈願文で、意識すると「あなたの霊よ、安かれ」で、人名ではなく祈願文だとおっしゃっている。井本英一先生はペルシア語の部分「ポーフトール」と読み、「救世主」という意味の方言形であると位置付けられました。

ただ焼印の方は、東野治之先生ものべるように「ニーム・シール」（半西）では意味に発展がない。茨木市の隠れキリシタンの墓碑や京都の墓碑、景教遺物を見ると、十字はどこにあるか。信仰者の目で見ると、十字架は上方に仰ぎ見るもので、ふつう上にある。私は天地を逆転させて、十字を上にして、文字をソグド語で読めないかと思つたのです。

焼印の「ニーム・シール」は、アルファベットでは「NYMSYR」です。これを逆転させると、左側が「RYS」になり、右側が「MYN」。



『アラム語—日本語単語集』を調べると、「RYS」は「頭（かしら）」とか「始まり」と出てくる。「レーシユ」です。もう一つの「MYN」は「メーン」で、「水」、「国、国民」とあります。合わせて、「諸国民の頭（かしら）」始まり、そういう意味だと思つたんです。ところが、アラム語には「S」の音が二つあるので、厳密に探すと、セム語関係の辞典の中に「救い」という単語が出てきた。で、「諸国民の救い or 頭」、原音的には「救い」の方がいいのではないかと考えています。

ペルシア語の刻銘を井本英一先生は「救世主」と訳し、十字はネストリウス派かマニ教の十字、印文はイラン系のソグド文字で書かれていますから、ペルシア系であることははっきりしている。「諸国民の救い」という言葉に、十字架のキリストをイメージするのも間違っていないと思います。従って法隆寺に、光明皇后追善供養のためにソグド人が香木を献納した、そういう結論になるわけです。

このように、アジア最古のソグド語のキリスト教印が飛鳥に伝来していることが分かった。『火の路』にいうペルシア文化の飛鳥東漸は確実であるというのが私の結論です。

それにしましても、松本清張という方は巨人だとあつたと本当に感じます。四十年前の『火の路』の先見性も、よくここまで見通せたと思えました。一つ一つ追っかけていくと証拠があがってくる、その立証性には、本当に脱帽も脱帽、脱ぐ帽子がない感じですよ。

伯爵夫人ミツコ 激動のヨーロッパに咲いた華

— 松本清張「暗い血の旋舞」 —

開催期間 平成26年8月1日(金)～11月3日(月・祝)
場 所 松本清張記念館地階 企画展示室
入 場 料 一 般 500円 中高生 300円
小学生 200円 ※常設展示観覧料に含む

「暗い血の旋舞」は清張が1987年に発表した作品です。ここで描かれるミツコ・クーデンホーフ=カレルギー(青山光子 1874～1941)は文明開化間もない東京で生まれ、オーストリア=ハンガリーの外交官と結婚、渡欧しました。「最初に国際結婚をした日本人女性」として知られています。

第一次世界大戦の勃発、オーストリア=ハンガリー帝国の

崩壊、ナチス・ドイツの台頭——ミツコはヨーロッパの激動の時代に直面します。そして夫亡きあとも逞しく生き抜き、ふたび日本の地を踏むことなく人生の幕を閉じます。

清張はミツコを通して、中欧近代史の真実に迫ろうとしました。本展では、ミツコ・クーデンホーフ=カレルギーの数奇な運命に光をあて、「暗い血の旋舞」の作品世界をご紹介します。

I 清張が描いた“ミツコ”

「暗い血の旋舞」は、NHK特集「ミツコ 二つの世紀末」(出演:吉永小百合)との共同取材に基づくメディアミックス作品としても注目を集めました。



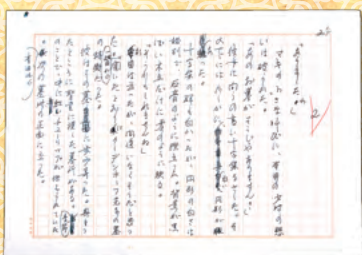
吉永小百合とウィーン・ホーフブルク宮殿で取材する清張
写真提供:吉田節子

II ミツコを取り巻く世界

ミツコは夫ハインリッヒとの間に、のちに「EUの父」として知られる次男リヒャルトをはじめ、七人の子どもたちに恵まれました。



「ロングネックレスの伯爵夫人」
ミハエル・クーデンホーフ=カレルギー筆



「暗い血の旋舞」直筆原稿



「暗い血の旋舞」
1987年4月、日本放送出版協会

IV 国境を越える探求心 清張の取材旅行



清張はオーストリア・スイス・チェコスロバキア(当時)を丹念に取材し、考察を深めます。自ら手がけた写真やスケッチを通して、その取材紀行を追体験します。

ミツコが晩年を過ごした家を取
材する清張
写真提供:飯田隆夫

III 光子からMITSUKOへ



ミツコは「暗い血の旋舞」のほか、評伝も多く、漫画、演劇など、様々なかたちで愛されています。

清張が帯文を書いた木村毅著
「クーデンホーフ光子伝」

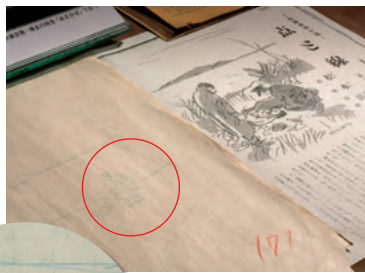
1971年6月、鹿島研究所出版会



清張のスケッチ(ホテック分家の館)

展示品紹介

「点と線」直筆原稿のメモ



作家専門になる以前の、清張の職業といえば、石版印刷の職人からスタートして、朝日新聞社では広告デザインを手がけていたことは、皆さんご存知だろう。

かつての職業柄か、小説の相棒である『挿絵』には、格別思い入れがあるらしく、「西郷札」が「週刊朝日」に掲載されたときのことを（岩田専太郎氏の挿絵で、さすがに朝日で、大家の画家をたのんでくれるものだなと感激した。おかげで作品は引き立ち、予想以上に読まれたようである）※1と書いてある。

記念館に、「点と線」の資料が展示されている場所がある。年譜で、清張がベストセラー作家になった頃を示すあたりにケース展示している。その中で、「点と線」の直筆原稿の一枚を裏返し、そこにうつつらと描かれた落書きのようなものを見せているものがある。

この絵だけでは、何のことやらわからないが、連載された「旅」の第二回目を見ると、ほぼ同じ構図の挿絵が冒頭にある。つまり、清張が原稿の裏に、挿絵画家へのメッセージを描いていたのだ。

この絵は、香椎海岸で佐山とお時の遺体が発見される場面。メモは素描だが、清張が伝えたかったのは、いったい何だろう。

昭和八年、清張は博多の嶋井精華堂印刷所に、半年間ほど修行のために住み込んだ。その頃か、香椎海岸から和白海岸のあたりによく行ったようだ※2。万葉集にも詠われた当時の面影残る風情だったという。その時の印象が、「点と線」に生かされている。

作家が挿絵にまで干渉する、というのは、挿絵画家にとっては、少し有難迷惑なこともかもしれない。前号（館報45号）に掲載した山本幸正氏の研究発表によると、新進作家の清張が、大物挿絵画家の生沢朗に、度々細かく指示するも、けつこう無視されていることがわかり、興味深かった。一方で、「砂の器」連載にあたり（作者、さし絵（朝倉根氏、編集者の三身一体となつて協力すれば成功に漕ぎつける自信はあります）との言葉もあり、これも注目される。

当館でも、これまで何度か挿絵展を開催した。風間完、杉全直、濱野彰親氏いずれの画家も、清張との同行取材や、挿絵を書くための材料の提供、指示などがあつたことを、思い出とともに語っている。出来栄えを見る限り、幸福なケースと思われる。初出でなくては味わえない作品の彩り——そこへ添えられたのは、読者への気遣いなのではないだろうか。

（※1）エッセイ「西郷札のころ」

（※2）西島伊三雄氏「博多のデザイナー—故人の証言や、清張の「自作再見」による。

（専門学芸員 柳原暁子）

作品の舞台を訪ねて

「眩人」——玄昉という人 ① 板櫃川

板櫃川は、松本清張記念館のある、ここ北九州市を流れる川の一つである。地元の河川愛護活動が盛んで、沿川住民で構成する「かわわだ会議」が組織される等、市民参加による川づくりが進められてきたと聞く。街中の流域で、整備された散策道を行くと、犬を連れた人とすれ違い、水辺で語らう姿があつた。

ふと見ると、橋の側に一枚の案内板が立っている。「板櫃川古戦場跡」。時を遡ること千二百有余年、天平一（七四〇）年、大宰府の次官であつた藤原広嗣が当時の失政を指摘し、天地災異の原因とみなす僧「玄昉」と下道真備（のちの吉備真備）の追放を求めて挙兵した。いわゆる「藤原広嗣の乱」として知られる合戦の舞台が、ここ板櫃川である。

小倉市（旧）の板櫃尋常小学校に一時学んだことがあり、この板櫃川のあたりはよく歩いたものである。板櫃川は川幅もせまくなつていて、とても両軍が川をはさんで対峙したような大きなものではなかった。先生から広嗣合戦の話聞いてもびんとこなかったことを憶えている。

（講談社「古代の終焉 清張通史6」より）

余巻と各種の仏像をもたらし、（日本の朝廷でも）（尊んで僧正に任じられたが、その後（天皇のほでな寵愛が目立つようになり、次第に僧侶としての行ないに背く行為が多くな）り、（左遷された場所で死んだ」と記す※1。一方で「今昔物語集」などは皇后との醜聞を仄めかし、この路線を踏襲した史料も複数ある。

「最期も、謎に包まれている。「続日本紀」は広嗣の霊に殺されたとの風説を記すに留めるが、清張は、作中、登場人物にもっと現実的な言葉で語らせる。すなわち、（玄昉・真備の罪を弾劾して謀反し、）敗戦により（斬られた）（広嗣の残党が襲撃して）（殺害）した、あるいは、（宮廷の秘密をあまりに知りすぎた）として、時の権力者が（放った刺客）に（暗殺）されたのではないかと疑う。

清張は、「気をつけなければいけないのは、歴史は時の権力者の手で作られるということ。」※2と述べている。史料の行間に作為臭を嗅ぎ取り、独自の推理で復元すること、玄昉という名の人間が、天平の世を躍動する。幾多の歴史上の人物のなか、あえて玄昉に眼をとめた清張。その謎めいた生涯と、僧侶らしからぬ行ないゆえに、惹き付けられるものがあつたのか。

今に残る風景の向こうに、清張が見た玄昉の面影を求め、ゆかりの地を訪ねる。次号へ、続く。

（※1）『続日本紀（上）全現代語訳』宇治谷本善善著（二九九二年講談社学術文庫）

（※2）社大に描く日本民族の歩み「清張通史」三年間のロングラン。松本清張氏に聞く「岸田今日子さん」東京新聞一九七五年二月四日掲載

（加地尚子）



出前講演に行ってきました!

両講演とも、講師は柳原専門学芸員が務めました。

市立八幡西図書館 特別教養講座

- 開催日 3月1日(土)
- 参加者 一般の方々約40名

「松本清張を育んだ読書
～大切なことはすべて故郷・北九州で学んだ～」



講演終了後にも、質問やご意見など、講師席まで熱い思いを届けてくださいました。

北九州市観光案内 ボランティア研修

- 開催日 4月30日(水)
- 参加者 観光案内ボランティアの方々約40名

「松本清張と
北九州市との関わり」



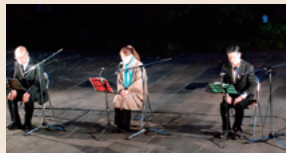
市立生涯学習総合センターでの講演後、記念館で、企画展「北九州市と松本清張」を解説付きで観覧していただきました。

友の会 活動報告

朗読劇『球形の荒野』

■4月19日(土) 参加者 135名 記念館 屋外特設スタンド

劇団前進座による朗読劇は、今年で11回目を迎えました。今回の演目は、「球形の荒野」。長編推理小説の名作が、迫力と感動に溢れる朗読劇の作品と



して見事に描き出されました。屋外特設スタンドでしか味わえない臨場感も醍醐味のひとつとなっています。観客を惹きつけて止まない素晴らしい脚本と熱演に、今回も参加者から多くの称賛の声をいただきました。

清張サロン

清張サロンは、清張作品や清張に関する話題をテーマとして、講師を招いてのお話や参加者との意見交換・交流等を目的として開催しています。第7回は、記念館との共催による「特別講演会」として、友の会会員のほか一般市民の参加も募りました。講師の分かりやすく掘り下げた解説により、清張や清張作品への理解が深まる充実したサロンになりました。



- 第6回 3月20日(木) 参加者 26名 記念館 地階ホール
 - テーマ：火野葦平と松本清張
 - 講師：小林慎也氏(元梅光学院大学教授・友の会会長)
- 第7回 6月14日(土) 参加者 70名 記念館 企画展示室【特別講演会】
 - テーマ：松本清張「表象詩人」と田中角栄「日本列島改造論」
 - 講師：松本常彦氏(九州大学大学院教授)

春の文学散歩『ゼロの焦点』の舞台等を訪ねて

6月1日(日)～3日(火) 参加者 25名

- 1日目 福井駅→永平寺→東尋坊
- 2日目 鶴来白山比咩神社→千里浜なぎさドライブウェイ→妙成寺→巖門・清張歌碑→ヤセの断崖・義経の舟隠し
- 3日目 金沢城公園→石川四高記念文化交流館→兼六園

今回は、「ゼロの焦点」をテーマに、小説や映画の舞台となった金沢、能登、金剛を訪ねる2泊3日の旅でした。3日



間とも天気恵まれて気温が連日30度を超える中、東尋坊や巖門から望む日本海は碧く、冬とは違った絶景を味わいました。また、旅先での親睦会は会話も弾み、会員同士の交流を一層深めました。



参加された皆様から「楽しい毎日だった」「勉強になった」「次回も参加したい」などの感想をいただきました。

友の会会員 更新のお知らせと新規会員募集

松本清張記念館友の会は8月1日～翌年7月31日を1年度として、文学散歩や清張サロン、講演会、生誕祭、『友の会だより』の発行、記念館に関する情報提供など多彩な事業を展開しています。年会費は3,000円です。皆様のご入会を心よりお待ちしております。

友の会入会のお申し込みは、松本清張記念館友の会事務局まで
TEL. 093-582-2761

平成26年度
中学生・高校生

読書感想文 コンクール



清張作品の読書感想文を、中学生・高校生を対象に募集します。

若年層に、より多くの作品に親んで欲しい、表現力を学び豊かな心を身に付けてもらいたいという願いから、このコンクールは始まりました。そして、これからを担う若者たちに、探求の人・松本清張の精神を伝えていくことができれば幸いです。

■**応募対象** 全国の中学生・高校生

■**課題図書** 中学生・高校生ともに下記から1作品

「**軍師の境遇**」(『軍師の境遇』角川文庫、『軍師の境遇』河出文庫)

●黒田官兵衛の生涯を描いた長編時代小説。

「**顔**」(『張込み』新潮文庫、『声』光文社文庫)

●短編推理小説。

「**眼の壁**」(『眼の壁』新潮文庫)

●長編推理小説。

■**応募方法**

- 中学生、高校生ともに1200～2000字程度の読書感想文を書き、応募用紙に添えて提出してください。
- 手書き、ワープロどちらでも結構です。ただし、全体の字数が分かるように応募用紙に1行の字数×行数を記入してください。
- 原稿は自作で未発表のものに限ります。なお、応募原稿はお返しいたしませんので、必要な人はコピーをおとりください。

■**応募締切** 平成26年10月31日(金) ※当日消印有効

■**応募先** 松本清張記念館 感想文コンクール係

※応募用紙は記念館HPからダウンロードできます。

■**選考** 松本清張記念館内の選考委員会により選考します。

■**発表**

最優秀賞、優秀賞の受賞者には、12月下旬頃、本人と学校に通知し表彰式を行います。なお、入選の結果は、当館発行の「館報」で発表します。その場合、著作権は松本清張記念館に帰属します。

■**賞品** (受賞人数等、変更の場合もあります。)

- 最優秀賞(1人)**
《モンブラン》万年筆「マイスターシュテックNo.149」
- 優秀賞(中学の部…1人)(高校の部…1人)** 文具など(未定)
- 佳作(中学の部…3人)(高校の部…3人)** 図書カード その他
※なお、最優秀賞は中学の部、高校の部で各一回ずつの受賞と限定させていただきます。最優秀賞受賞後の応募も歓迎します。過去の受賞者からの応募作品が賞に該当する場合は「特別賞」として「館報」掲載を予定しています。

●協力 モンブランジャパン



イラスト:山藤 章二

編集・発行

松本清張記念館

〒803-0813
北九州市小倉北区城内2番3号
TEL 093 (582) 2761
FAX 093 (562) 2303
http://www.kid.ne.jp/seicho
制作 (株)エディックス

- 開館時間** 午前9:30～午後6:00 (入館は午後5:30まで)
- 休館日** 年末(12月29日～12月31日)
- 観覧料** 一般/500円(400円) 中・高生/300円(240円)
小学生/200円(160円) ()は30人以上の団体
- アクセス** JR: 小倉駅から徒歩15分 西小倉駅から徒歩5分
小倉駅からはバスをご利用くださいと便利です(小倉城・松本清張記念館前下車)
車: 北九州市都市高速、大手町ランプより5分

松本清張記念館



松本清張研究奨励事業 入選企画決定

「松本清張研究奨励事業」は16回目を迎えましたが、多様なアプローチの応募企画が寄せられました。選考委員会による厳正な審査の結果、次のとおり入選者が決まりました。

第一線で活躍される入選者も増え、成果の蓄積が清張研究をさらに発展させています。今回の入選企画も、松本清張の活動の幅広さを示し、成果が期待されます。

企画名 松本清張の見た関東州 ― 平石氏人資料を手がかりとして―

入選者 平石 淑子(日本女子大学教授)

奨励金 500,000円

企画名 松本清張とラオス ― ベトナム戦争の記述をめぐる研究―

入選者 尾崎 名津子(日本大学・早稲田大学 非常勤講師)

奨励金 400,000円

第17回 松本清張研究奨励事業募集

募集要項

対 象 ① 松本清張の作品や人物を研究する活動

② 松本清張の精神を継承する創造的かつ斬新な活動
(調査、研究等)

※上記①②の活動で、これから行おうとするもの。ジャンル、年齢・性別・国籍は問いません。ただし、未発表に限ります。個人又は団体も可。

内 容 入選者(団体)に130万円を上限とする研究奨励金を支給します。

応募方法 今後取り組みたい調査・研究テーマ等の内容が具体的に分かる企画書、予算書、参考資料(様式は自由、ただし日本語)を、平成27年3月31日までに応募してください。

※詳しくは記念館までお問い合わせください。

●**編集後記**● 前回企画展「北九州市と松本清張」には7,000人を超える方々にご来場いただき、感謝申し上げます。新企画展では、結婚後欧州に渡り、彼の地で第一次世界大戦下に生きた黒髪の伯爵夫人「ミッコ」に迫ります。清張さんが彼女を描いていたことをご存知ない方も多いのではないのでしょうか。どうぞご期待ください。

開館16周年記念講演会は、昨年の松本清張賞を受賞し、「食堂のお姉さま」として話題をさらった作家・山口恵以子さんをお招きします。受賞作「月下上海」は、第二次世界大戦中の上海を舞台に、折り重なる不幸にもめげず強靱に生きる財閥令嬢がヒロインです。女性パワー全開の夏。記念館には今、涼やかな風がそよいでいます。(N.K)

